

からすとうさぎ

小川未明

青空文庫

お正月しょうがつでも、山やまの中なかは、毎日まいにち寒い風かぜが吹ふいて、木きの枝えだを鳴ならし、雪ゆきがちらちらと降ふつて、それはそれはさびしかったのです。

「ほんとうに、お正月しょうがつがきてもつまらないなあ。」と、からすは、ため息いきをつきました。

「町まちの方ほうはにぎやかなのだろう。ひとつ出でかけてみようかなあ。」と、しばらく木きの枝えだに止とまつて、考かんがえていましたが、そのうちに、そう心こころにきめて、遠とおい町まちの方ほうをさして飛とんでゆきました。

どこを見みても、雪ゆきの野原のほらで真まつ白しろでした。だんだん町まちが近ちかづくにつれて、道みちの上うえに人ひと通おりが多おほくなりました。雪道ゆきみちの上うえを歩あるいていくものもあれば、そりに乗のつていくものもあります。

また、お正月しょうがつのご馳走ちそうを造つくるために、魚さかなを運はこぶ所ところもあれば、みんなの喜よろこぶみかみや、あるいは炭すみや、薪たきぎのようなものや、塩しおさけなどを積つんでいく所ところも見受みうけられたのでありました。

欲深よくふかなからすは、なにを見みてもほしいものばかりなので、もしや、このあたりになに

か落ちていはしないかと、あたりを見まわしながら、あつちの木、こつちの木とうろろ飛びまわっていました。

すると、町からすこし離れたところに森があつて、そこに一軒のりっぱな家があり、煙突から煙が上つていました。からすは、その森にきて止まると、家の中からは、おいしい匂いが流れていましたので、からすは、とうとういちばん低い小舎の屋根まで降りてきました。

それは、この家の犬小屋でありました。中には、一匹きの犬が、わらの上にはらばいになつていましたが、その白と黒のぶち犬を、どこかで見覚えがありましたので、からすは、じろじろと犬の方をながめていました。犬は、みよなからすと思つたのでしよう。ふいに、「ワン。」といつて、からすをおびやかしました。からすは、この瞬間に、犬のことを思い出したのです。

「やあ、犬さん、あなたのお家はここですか？」と、声をかけました。犬は、不思議そうにからすを見ていましたが、

「からすくん、いつ君にお目にかかったことがあつたかね。思い出せないか？」と、犬は、たずねたのです。からすは、ずるそうな目つきをして、犬を見ていましたが、

「あなたは、先だつて、山でうさぎを追いかけて、とうとう逃がしてしまいなされたのを、私は、木に止まつて見ていました。あなたは、たいそう残念そうでありましたね。」と、からすは、いいました。

「ああ、あのとき、君は、どこかで見えていたのですか。僕は、主人に対して、ほんとうに面目なかつたのだ。」と、犬は、急に、恥ずかしそうにして答えました。

「なに、あのうさぎなら、また捕らえることができなともかぎりませんよ、私が、うまくいつて、この野原へつれ出してくることもできるのです。」と、からすはいいました。

犬は、このあいだ、主人のお伴をして、猫に出かけて、主人が打ち損なつたうさぎを追いつめて、もうすこしで捕らえるところを逃がしてしまつたので、残念に思つていた際ですから、からすのいつたことをきいてどんなに喜んだでしょう。

「君の智慧で、この野原まで、あのうさぎを誘い出してくれたら、僕のできることなら、どんなお礼でもするよ。まあここへ下りてきたまえ。お正月のご馳走があるから、食べてくれたまえ」と、犬はいいました。

からすは、そういわれるのを待つていました。さつきから、犬のそばにあつた、コンビーフのかかつたご飯や、餅の残りなどがほしかつたのです。からすはさつそく下りてきて、

たくさん食べました。そして、明日の晩方、裏の広い雪の野原へ、うさぎを連れてくることを約束して帰りました。犬は、今度こそ、うさぎを見つけたら、逃がすまいと考えました。そして、わらの上に臥ながら、

「うさぎは、山に餌がなくなつたから、からすの口車に乗つて、原へ大根の残りや、桑の枝を食べにくる気になるかもしれない。だが、りこうなうさぎだ、あのからすめ、うまく誘い出せるかなあ。」と、犬は、考えていました。

からすは、山へ帰ると、すぐに、うさぎのいる場所へやってきました。そこは、林の中の大きな木の根で、そこだけは雪が薄かつたのでした。うさぎは、根の洞穴の中で、子供とむつまじく暮らしていました。

「うさぎさん、こんにちは。」と、からすが、穴からのぞいて、声をかけました。

「なんですか、からすさん。」と、うさぎは顔を出していいました。

「お正月で、町の方がにぎやかですから、見物にお出かけなさるよう、おすすめにきたのです。」

「まあ、ごしんせつにありがとうございます。どんなににぎやかですか？」

「ちよつと、あちらの野原まで出てごらん下さい。みかんをたくさん積んだそりが通るし、

大根や、ごぼうや、お魚などを載せたそりが通りますよ。まあ、そのご馳走を見るだけでも目の楽しみになります。明日の晩方、暗くならないうちに、私が、いいところへご案内しますよ。」と、からすは、いいました。

「町に住む人たちは、ぜいたくですね。」

「ええ、ぜいたくですとも。そうそう、いつかあなたを追いかけた犬までが、コンビーフのかかったご飯を食べていましたよ。」と、おしやべりのからすは、いいました。りこうなうさぎは黙ってきいていましたが、からすが帰ると、穴の中に入って、子うさぎに向かい、

「もう私たちは、ここに安心していることができなのだよ。さあ今夜のうちに引越しをしましょう。」と、いつて、からすの気のつかない、山の奥へ入ってしまった。明るる日、からすがきたときには、木の根の洞穴の中は、まったく空っぽになっていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

からすとうさぎ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>